

## 第14回「プロフェッショナル、について考える」(2011/10/23)

場所：青山アーキテクトカフェ

司会：堀越（代理）、文責：野田

参加者：17人

要約：主に職業について、役割や動機の観点から議論しました。仕事は辛いものであり、我慢することが美德とされるのはなぜかという問題提起があり、議論しました。

お題の説明：第6回に大人、第10回に役割というお題を取り上げました。関連するお題として、プロフェッショナルについて取り上げることにしました。司会予定の野田が体調不良のため、堀越が代理で司会をしました。

内容：

### 1. 「プロフェッショナル」が意味するもの

- ・ 辞書で意味を確認された方が数人おられました。「職業」という意味と、「職業に必要な能力が、専門的である、或いは、高度な、ある一定水準に達していること」という二つの意味があるとのことでした。後者の意味でのプロであるかどうかを参加者に尋ねたところ、殆ど手が上がりませんでした。
- ・ 仕事には、姿勢、プロセス、アウトプットの三要素が必要であるとの意見がありました。

### 2. 専門家としてのプロ

下記の意見がでました。

- ・ 一定の水準に達しており、コンスタントに期待に応えられ、専門性を持っている。対人業務の場合、アウトプットで評価しにくいいため、残りの二つの要素である、姿勢とプロセスが重要である。
- ・ プロフェッショナルな人も、それほど仕事に情熱を傾けない人も、それぞれ好きにやっているのだから、プロフェッショナルでなくてもいいのではないか。
- ・ プロフェッショナルは仕事に対する姿勢が問われる。通常は真剣な姿勢がプロとしての条件であるが、セールス等の客商売では、自分がリラックスしないと、お客さんから見た印象が悪い。

### 3. 職業としてのプロ

- ・ 生活に必要な報酬が保証されていても働くのはなぜかについて議論しました。この場合、仕事そのものの魅力（内的動機：モチベーション）と、それ以外の、仕事で得られる金やステータスと言った、外的動機（インセンティブ）の両方が働く理由になる。しかし、内的要因と外的要因が、明確に区別できないのではないかという意見もありました。

#### 3.1 職業の報酬として得るお金と責任について議論した。

- ・ 一般的な職業では、金のやりとりが発生するため責任が伴う。依頼を受けて仕事を行うときに、自分のこだわりを捨てて妥協したり、割り切ったりすることがある。妥協であると感じるとつらい場合がある。
- ・ 職業以外でも責任が伴う場合もある。一例として議員選挙の投票がある。

- ・ プロフェッショナリズム⇔アマチュアリズム⇔コマーシャリズムについて。プロフェッショナルに対比する言葉として、アマチュアリズムがあり、更にそれに対比する言葉としてコマーシャリズムがある。プロフェッショナルが専門的であるが、アマチュアリズムも高いレベルを追求する姿勢と言う意味ではプロフェッショナルであり、コマーシャリズムは金儲けを重視する。プロフェッショナルは報酬に対応する責任を十分に果たすという意味である。

3.2 なぜ働くか 生活に必要なお金が保証されていても、「働きたい」という人がいるが、その場合報酬以外の動機として、なぜ働くのかについて議論した。

- ・ そもそも仕事の内容自身に興味がある場合がある。それに対し、やりたいことがあるが、生業としては収入が乏しい、或いは個人のこだわりと依頼主の考えが対立してつらく、副業として、或いは趣味としてやっている。
- ・ 組織で仕事をする場合、仕事の内容や結果を他人から評価される。自分自身では気づかなかった評価を受けることで、前進することが出来る。他者の評価を受けられることが働くことの理由の一つである。

3.3 仕事は辛いものであるとなぜ考えるのか

- ・ 「仕事が辛いことで、それを我慢することが美德である」となぜ考えるのかと言う問題提起がありました。ヨーロッパやアメリカでは、切符売り場の職員やウェイトレスなどの態度が悪い。日本はとても良い。コンビニでバイトしていたときに、7時間程度立ちっぱなしで、疲労したが、(客に見られていなくとも)壁に寄りかかると、見苦しいので、やってはいけないと店主に注意された。日本では、店員がちゃんとしているのが当たり前で、そのためには店員が辛い思いをすることを軽視する。
- ・ それに対し、商家の滅私奉公に見られるように、苦勞して仕事に励むと、将来暖簾分けをして貰えて、成り上がることが出来たからである。ヨーロッパでは親方になるのは非常に難しい。また、組織で仕事をする際に、管理するための理屈、方便として、「努力(辛抱)＝美德」という考えを導入したのではないか。

プロフェッショナルと言う言葉は西洋に起源がありますが、日本的な、苦行をよしとする考え方に結びついているようです。